
日本軍 「風」の航空戦記

流水郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日本軍 「風」の航空戦記

【Nコード】

N1998F

【作者名】

流水郎

【あらすじ】

時代に取り残された水上戦闘機、明日のない国のために戦った不屈の名機、遅すぎた零戦の後継機、幻と消えた新鋭機……その名に「風」の文字を含む戦闘機の物語です。 最終章後編、掲載しました！

伴 侶 ・ 水 上 戦 闘 機 『 強 風 』（ 前 編 ）（ 前 書 き ）

第一弾は「強風」。

後の「紫電」「紫電改」の母体となった、不遇の名機です。

伴侶 - 水上戦闘機『強風』（前編）

川西 水上戦闘機『強風』

乗員一名

最高速度488・9 km/h

武装 九七式三型改二7・7 mm機銃×2、九九式二号三型20 mm機銃×2

日本海軍が南洋諸島への侵攻作戦のため、飛行場完成までの制空権の確保や、空母艦載機の不足を補うために開発した水上戦闘機。水上機のほとんどが連絡・偵察任務に使用されていた第二次大戦において、極めて珍しい本格的な水上戦闘機であり、自動空戦フラップをはじめとする数々の新機軸が組み込まれていた。

しかし、本機が実戦投入された時、日本は完全に守勢に回っており、本格的な水上戦闘機の活躍の場はほとんど失われてしまっていた。

戦果はインドネシアの島々に配備され、攻撃で米軍のB-24、B-29などを少数撃墜するにとどまった。

しかし本機の実在は無駄では無かった。

後に本機『強風』を陸上戦闘機化した『紫電』が開発され、日本海軍最後の傑作機と言われる『紫電改』へと発展していったのである。

… … …

日本の南方に浮かぶ、地図にも載らない島。
そこに、水上機からなる戦闘部隊があった。
任務は、本土へ向かう敵重爆撃機の迎撃である。

「それにしても、暑いな」

岸边に座る搭乗員が、汗を拭う。
同じく汗まみれの整備員が、水上戦闘機『強風』のエンジンを点検している。

「すぐに慣れますよ。暇な時には泳げばいいし」

整備員の八谷が、苦笑しつつ答える。

「しかし、暑いからって俺たち整備員に八つ当たりする奴らもいますね」

「そんな奴らがいるのかよ」

「二式大艇の乗組員たちですよ。特に機長の野口中尉ってのが最悪でして」

嘔吐するような表情で、八谷は言う。

「気に入らないことがあつたら全部俺たちのせいにしてやるんです

よ、全く」

「命知らずな奴だな。お前達整備がちょっとしたでも手を抜けば、エンジントラブルで墜落するだろうに」

「ええ、今まで何度そうしてやろうか……ゴホン」

言葉を呑み込んで、一つ咳払いをする。

「そう言えば中山少尉殿は、三田村一飛曹には会いましたか？」

「三田村？ いや……」

中山健二少尉は、首をよこに振った。

彼は昨日、この基地に配属されたばかりなのである。

「有名なのか？」

「有名……まあ、この島では。少し変わった人でしてね。ほら、あそこにいます」

八谷の指さす先。

別の強風の操縦席に、一人の男が座っていた。身を乗り出して、機関部を撫でている。

「へえ……ちよっくら挨拶してくるか」

中山は立ち上がって、尻についた砂を払う。

そして三田村一飛曹の元へと歩み寄った。

よく見ると、歳は中山と同じくらいのような。

「三田村一飛曹かい？」

中山が問いかけると、彼は機上でぴしつと敬礼をし、

「はい、三田村であります！」

と答えた。

「俺は中山健二。階級は少尉だ。昨日この島に来た」

「はい、存じております。宜しく願います」

なんだ、礼儀正しい奴じゃないかと中山は思った。

「どうだ、一杯やらないか？」

「いえ、せつかなのですが……」

三田村は苦笑する。

「こいつ、今日は俺にいてほしいみたいで……」

「こいつ……？」

「こいつです」

機体をぽんぽんと叩きながら、三田村は言った。

「強風……のことか？」

「ええ、奈津江って言うんです。可愛い奴でして」

それを聞いて、中山は数秒間、空いた口が塞がらなくなった。
戦闘機に女の名前を付けて可愛がる者など、初めて見た。

「……まあ、これから宜しく頼む」

そう言つて中山は、自機の所へ戻つていった。

八谷はエンジンの点検を終え、岸辺で休んでいた。

「……どうでした？」

八谷が尋ねる。

「うん、確かに変な奴だ。自分の機体を本当に女だと思つてるのか
よ？」

「むしろ、女房と思つてるようです。時々、今夜は一緒に寝るとか
言つて、操縦席で一晩過ごすこともありますね。話しかけること
も多いですし」

「……。よっぽど女に飢えてるのか」

このような孤島では無理もないか、と中山は思った。
何故にこのような島に基地を置くのだろうか。

何かが隠してあるのか。

「流行病で恋人を亡くした、とか聞きましたがね。……しかし、あ
の人はただの変人じゃないですぜ」

「腕は一流、か？」

「いいえ」

八谷は首を横に振る。

「一流の上に『超』が付きます」

「そこまでか？」

「はい、コンソリ（B-24）を三機も墜としてるし、この前なんかメザシ四機に追い回されて、無傷で帰ってきました」

「P-38四機に？」

ロッキード P-38 『ライトニング』。

『メザシ』は日本軍がつけた呼び名である。

双発・双胴型の高速戦闘機で、双発故に旋回性能は低く、日本軍の零戦に低空での巴戦に誘い込まれて撃破される機体が多かった。

しかしその高速性を行かせば零戦も対抗できず、一撃離脱戦法で多くの戦果を挙げた。

無論、普通に考えれば水上戦闘機で逃げ切れる相手ではない。

しかも、三田村は無傷でやってのけたという。

「しかも、帰ってきてから言った台詞が、『こいつの柔肌を傷つける奴は、ただじゃおかない』って……」

「柔肌……」

中山は軽く呆れた。

しかし同時に、三田村の戦いを見てみたいという気持ちにもなった。

そしてその機会は、二日後に訪れた。

B - 24『リベレーター』爆撃機の編隊が接近中との知らせが、基地に響き渡ったのだ。

中山は自機に乗り込み、迎撃に出る。

基地の強風が次々と離水し、敵編隊を探す。

「……ん？」

一機の強風が、前に出て翼を振った。
誘導する、という合図だ。

「あれは……三田村だな」

僚機と共に三田村の後をついていくが、敵機の姿は見えない。
だがしばらく行くと、小さな点々が見え始めた。

「すげえ……どんな視力してるんだ、あいつは」

驚きながらも操縦桿を引き、高度を上げつつB - 24編隊に迫る。
相手はまだ気づいていない。

敵の上方から、奇襲をかけるのだ。

B - 24はどんどん大きく見えてくる。

敵が気づいて機銃を撃ち始めたが、もう遅い。

B - 24が真下に来たとき、中山はトリガーを引いた。
翼下に搭載された、時限起爆式の30kg爆弾が二つ、投下される。

一つは命中せずに空中で爆発したが、もう一つは胴体付近で爆発し、傷を負わせた。

「……小破か。やっぱり簡単にはいかないぜ……」

舌打ちしつつ、銃弾に大して回避行動を取る。

その時、三田村の機が見えた。

既に30kg爆弾を投下したらしい。

「
！」

中山は驚愕した。

三田村の強風が突如反転し、B-24の背中目がけて急降下を始めたのである。

7・7mmと20mmの機銃を撃ちながら。

- - 空中衝突

中山の脳裏にその言葉が閃いた刹那、B-24が爆発。

主翼が片方もげ、黒煙と炎を巻釣らしながら墜ちていく。

そして三田村は、爆発する相手の脇をすり抜け、機体を引き起こす。壮絶な光景に、中山は声も出なかった。

真上からの攻撃により、敵銃座の死角へと入り込んだのである。

（超一流……間違いない、超一流の戦闘機乗りだぜ、あいつは……）

……その日は、三田村が一機を撃墜した他に、中山や他の隊員が数機のB-24を小破した。

「視力、判断力、技術、度胸……」

その日の夜、八谷と共に自機を修理しながら、中山は呟いた。
機関部に機銃弾が一発、当たっていたのだ。

「そして誇り……と。奴は戦闘機乗りに必要な物を全部持つてる」

「それに加え、機体を知り尽くしてます。自動空戦フラップも完全に使いこなしてますよ」

フラップは離着陸時に使用される高揚力装置だが、熟練した零戦乗りの中には、速度を墜としつつ効率的に旋回するため、空戦で使用する者もいた。

これはベテランの操縦士のみにできる技術だったため、速度と機体荷重を感知して自動的に作動する、自動空戦フラップが開発された。その試製品が、強風に搭載されているのである。

「……俺も負けちゃいけないな。仮にも二式水戦からのベテランだしよ」

二式水上戦闘機は、零戦一一型を水上機化したもので、開発の難航が予想された強風が完成するまでの「繋ぎ」として、太平洋戦争初期から投入された機体だ。

零戦の製造元である三菱が、現存機の量産で手一杯だったこともあり、水上機の経験が豊富な中島飛行機が改造・生産を担当した。

結果、実戦投入の遅れた強風よりも、繋ぎとして作られた二式水上戦闘機の方が、多くの戦果を残すことになってしまったのである。

……気がつくと、三田村が近くに来ていた。

「少尉、故障ですか？」

「ああ、コンソリから一発喰らっちゃったらしい。ほとんど直ったけどな」

中山は苦笑してみせる。

「少尉の女も、なかなか美人ですな」

「同じ機種だろ、美人も不細工もあるかよ」

「いや、ありますとも」

三田村は言った。

「同じ機種でも違いはあるんです。俺の奈津江は結構過激な飛び方が好きみたいでして」

「ほう」

考えてみれば、人間の手で作られる物なのである。

一機一機、微妙に違いがあってもおかしくない。

そういう面も含めて、三田村は戦闘機を女に例えているのだろうか。

「少尉のは大人しい生娘ですな」

「そうなのか？」

「ええ、頭も良さそうですね。あまり褒めると奈津江が妬きますが」

三田村は軽く頭を掻いた。

どうやら彼は奇人ではなく、とにかく飛行機を愛しているようだ。

「三田村一飛曹、お前は何処の生まれだ？」

「東京です。お袋が女流パイロットでしてね、昔から憧れてたんですよ」

「なるほど。親父さんは？」

「親父は船乗りだったらしいですが、居酒屋にツケ払いに行ったり帰ってこなかったとか、鯨に乗って旅に出たとか……諸説入り乱れ、よくわかりませんで……」

「なんだよ、そりゃ……」

その時三田村が、何かに気づいたように夜空の彼方を見た。

「どうした？」

「……エンジン音が聞こえます」

そう言われて、中山と八谷も耳を澄ます。

微かに、レシプロエンジンの音が聞こえてくる。

「ああ、確かに……」

「米軍の夜間偵察っすかね？」

音はどんどん近づいてくる。

やがて、それらの機体が肉眼で見える距離になった。

「グラマンだ！」

叫ぶと同時に、三田村が整備用の灯火を消す。

次の瞬間、機銃音が響く。

中山と八谷は強風から海に飛び込み、三田村はその場に伏せた。

銃弾は地面に穴を開けるだけだったが、三機のF6F『ヘルキャツ

ト』は夜空を旋回しつつ、島の地面へ度々機銃を撃った。

基地の人間が外へ様子を見に出たり、慌てて防空壕へ駆け込んだり、明かりを消したり、島中が混乱した。

しばらくしてF6Fは引き上げていったが、機銃掃射を受けて整備員が一人死亡した。

その後、隊員一同は司令官に招集されるが、そこで中山達ほとんどでもない発表を聞くことになったのだ。

伴 侶 ・ 水上戦闘機『強風』（前編）（後書き）

さて、続きは後編です。

強風……活躍はしなかったけど、なんか好きなんですよねえ……。

伴 侶 - 水上戦闘機『強風』 (後編) (前書き)

後編です。

伴侶 - 水上戦闘機『強風』（後編）

「全員揃ったな」

司令は一同を眺め、言った。

「では、作戦を発表する」

……まずこの島には、大量の白金が極秘裏に隠されていた。^{ブラチナ}

幕僚たちが日本が劣勢に陥った時のため、このような小島に隠しておいたのだという。

もう十分劣勢じゃないか、阿呆！……と、中山は心の中で叫んだが、何にしるそのことが米軍に知られてしまったのだ。

あえて配備する戦闘機を少なくし、米軍の目をかわすつもりだったようだが、何処からか情報が漏れたらしい。

先ほどの夜襲は、この島の戦力がどの程度か確認するためのものであり、敵本隊は明朝には攻撃を仕掛けてくるものと予想された。

「今夜中に、全ての白金を『晴空』に積み込み、明日夜明け前に脱出、本土へ向かう！ 私は連絡用の二式大艇に乗り、戦闘機隊は無論護衛をしてもらうが……」

脂ぎった顔の司令官は、三田村をじろりと見た。

「三田村一飛曹！」

「はっ」

三田村が静かに返事をする、司令官はにやりと笑って続けた。

「貴様とその部下二名は、時間稼ぎとして黎明期に敵機動部隊を攻撃せよ！」

それを聞いて中山は驚愕したが、三田村は無表情のままだった。

「以上！直ちに準備にかかれ」とだけ言つて、司令は去ろうとする。

その背中を追つて、中山は叫んだ。

「司令！」

「何だね、少尉？」

「司令は三田村一飛曹を、捨て駒にするおつもりですか！」

「捨て駒ではない。日本勝利のため、天皇陛下のための尊い犠牲だ」

平然とそう言い放つ司令に、中山は詰め寄る。

「水上戦闘機三機で、米軍の機動部隊相手に時間稼ぎなど、無意味です！」

「これは決定事項である！下がれ！」

「どうしても言うのなら、三田村一飛曹の代わりに自分を！」

司令は鬱陶しそうな目で、中山を睨んだ。

「何故に奴の肩を持つ！？」

「三田村の操縦技術は相当なものです！ 事実彼は今日の戦闘でも重爆を撃墜し、彼を失うことは大きな損失……」

「黙れ！ 決定事項だと何度言えばわかる！？」

司令は一喝した。

「大体これからは特攻の時代だ！ 時間稼ぎ程度で何を言うか！ そして三田村！」

今度は、相変わらず無表情の三田村に怒鳴る。

「貴様もだぞ！ もし逃げ出したりしてみろ、その場で撃ち落とすからなあ！」

司令は足早に歩き去っていく。

三田村が中山に近寄る。

「ありがとうございます、少尉。そのお気持ちだけで十分です」

「三田村……！」

「では、自分は奈津江の所へ戻ります」

三田村は手短に敬礼をすると、自機の方へ歩いていった。

「はん、馬鹿な奴だ」

嘲笑うように、そう言う者がいた。

八谷の言っていた、二式飛行艇の野口中尉だ。

「あいつ、司令からいつも嫌われてましたからねえ」

「当たり前だ、戦闘機を女だと思ってるような阿呆だぜ」

「頭がおかしくなってるんだろうよ。あんな野郎がこれ以上生きてても、お国のためにはならねえよ」

野口の部下達は口々に言う。

中山の手が腰の拳銃に伸びたが、ぴたりと止まった。

(……二式大艇は『晴空』二機を除けば、こいつらの機体だけだ。ということは司令もそれに乗る……)

中山は数秒間躊躇ったが、すぐに決心がついた。

そして、怒りの炎を燃やしながら八谷の元へ向かった。

……白金^{フラチナ}が、輸送型の二式飛行艇『晴空』へと積み込まれていく。
自機……奈津江の操縦席から、三田村はそれを眺めていた。

「……奈津江、今度は生きて還れない」

三田村は語りかける。

「俺もお前も……けどな……うん、そうさ。悔いは無い」

ふと微笑み、三田村は星空を見上げた。

「……お前に、争いの無いを飛ばせてやりたかったけどな。ごめんよ……」

……翌日……

まだ陽は昇っていない。

司令はすでに二式大艇に乗り込み、中山たちも準備をほぼ終えていた。

そして、三田村も……

「中山少尉、短い間でしたが、ありがとうございました」

「三田村……」

三田村は笑っていたが、中山は言葉が見つからなかった。これから死ぬ人間に、なんと言えば良いのだろうか。

「悔いはないです。どうかお元気で」

「……靖国で会おう」

中山は手を差し出す。

しかし三田村は、その手を握ろうとはしなかった。

「……自分は、靖国へは参りません」

三田村は言い放った。

「自分の意思で海軍に入ったのですから、国のために戦うのは当たり前だと思っています。ですが……死んだ後、英霊とか何とか言つて祭り上げられるの、嫌なんですよ。要するに、死んだ後も戦に協力させられるということでしょう」

「……お前……」

「死んだ後は、自由になりたい……ですから靖国へは行かず……」

子供のような笑顔で、頭を掻いた。

「……カモメにでもなつて、還ります」

そう言つて、三田村は中山の手を握った。
中山の目から、一滴の雫がこぼれ落ちる。

「中山少尉、出発時刻です」

「……ああ」

中山と三田村、そしてその部下は、向かい合つて互いに敬礼をした。
そのまま無言で、中山は自機に向かい、乗り込む。

三田村は部下二人に向き直った。

「俺の部下になつたばかりに、貧乏くじ引かせてしまった。申し訳

ない」

「何も言わないでください、小隊長」

部下の沢村二飛曹が、笑っていった。

「カモメになろうとスズメになろうと、小隊長について行きます」

「ちもろん、俺たちの女房も一緒にね」

そう言つて、自分たちの強風を指さす。

「……ありがとう。もうそれしか言えない」

三人は操縦席に乗り込む。

他の強風や、二式大艇が飛び立つのと同時に、三人の機体も逆方向へ離水した。

「お元気で、中山少尉……」

三田村達は事前に打ち合わせた通り、水面近くを飛行し、空を見上げる。

太陽が昇り始め、海を紅く照らす。

「……奈津江、敵機だ。行くぞ」

三田村の目には、遙か遠方を飛ぶF6Fの姿が見えていた。徐々に高度を上げ、後方の僚機もそれに倣う。相手はまだ気づいていない。

機首を上げていき、やがて三田村達は、F6F六機の下腹目がけて奇襲を仕掛けた。

「大丈夫だ、奈津江……お前と一緒になら、怖くない……」

敵は気づいたようだが、すでに射程圏内に入っていた。

三田村はトリガーを引く。

合計四門の機銃が火を噴き、一機のF6Fの主翼が真つ二つに折れた。

重装甲と言えど、20mm弾の直撃を、それも大量に受けたのだ。

三田村の射撃能力の高さが表れていた。

僚機の川本も、一機を撃墜する。

沢村が攻撃した機体は墜ちなかったが、機関部に傷を追う。

F6Fも散開し、反撃体勢をとった。

沢村が損傷させた敵機は母艦の方向へ機首を向け、離脱。

残る三機のF6Fが包囲するように襲いかかる。

同じ数とはいえ、水上戦闘機と艦上戦闘機がともに戦っては話にならない。

F6Fの圧勝だろう。

だが三田村たちには、逃げる場所も燃料も、残されていないのだ。戦っても勝っても、還れはしない。

最早自棄になっていると言ってもいいだろう。

それでも、三田村は冷静に操縦桿を握る。

「頑張ってくれ……奈津江！」

巧みにF6Fの攻撃をかわしながら、相手の後ろを取ろうとする。
ドッグフライ
巴戦の始まりだ。

沢村、川本も、自動空戦フラップの機能を生かして空戦を展開する。

だがやはり、大型のフロートを装備した水上機では、旋回能力では零戦に劣るとはいえある程度の格闘戦もこなせるF6Fには、完全に不利だ。

三田村の近くで、川本の強風が直撃弾を受け、散華する。

「くそっ……この化け猫が！」

川本を撃墜した機に向けて、機銃を撃つ。

しかし7・7mm弾が数発当たったのみで、F6Fはびくともしない。

その時さらに、沢村が被弾した。

煙を噴く沢村機が見えたが、三田村も後ろに付かれた。

「ちっ……」

逃げ切れないか……そう思ったとき、手傷を負った沢村の強風が突如反転し、三田村とすれ違う。

沢村が三田村の方を見て、敬礼をしたのが、一瞬だけ見えた。

「沢村……！！！」

次の瞬間、沢村機は三田村を狙っていたF6Fに、真正面から体当たりした。

轟音と共に、両機飛散する。

これで、一対二の戦いとなった。

「川本、沢村……」

三田村は呟いた。

そして、F6F一機目がけて背面急降下した。

「文字通り、格闘戦つて奴だ！」

操縦桿を引き、敵機と接触寸前で斜めに旋回。

強風下部のフロートが、F6Fの垂直尾翼を打ち砕いた。
急速にバランスを失い、F6Fは墜ちていく。

一対一。

最後のF6Fが、背後に付く。

「奈津江、お前ならできるよな」

三田村は機体を水平にする。

そこへF6Fが食らいついた瞬間、ラダーペダルを蹴った。
F6Fのパイロットは驚愕しただろう。

いきなり目の前から、敵機が消えていたのである。

そして次の瞬間には、下部から20mm弾を受けて墜ちていった。

「よし、『木の葉落とし』成功だ……」

。 零戦乗りが使ったと言われている、高等空戦技術・『木の葉落とし』

敵を後ろにつかせ、ラダーを蹴って機体を失速・沈下させる。

そして敵に自分の頭上を通過させ、素早く立て直して下方から攻撃するのだ。

相手の目からは、敵機が突然消えたように見えるのだ。

燃料系を見ると、殆どゼロに近づいていた。

「腹減ったか？俺もだ」

三田村は高度を下げる。
そしてゆっくりと、着水する。

「奈津江……俺の奈津江……」

ゆっくりと、愛機に語りかける。

彼は空を愛していた。

彼は海を愛していた。

そして、飛行機を……掛け替えのない伴侶を愛していた。

「ありがとな……お前は俺の、最高の女房だ……」

三田村は拳銃を抜き、自分の頭へ銃口を付けた。

「なあ……また一緒に飛ぼう。飛ぼうな……」

三田村は引き金を引いた。

……

中山たちは本土に到着した。
白金を積んだ晴空は無事だったが、司令官の乗っていた二式飛行艇

の姿は無い。

途中、エンジンが突然火を噴いて墜落したのである。

晴空から降りてきた八谷と、中山は顔を見合わせ、頷きあった。

「……軍人の階級なんて所詮、空に上がってしまえば意味ないのさ」

「儚いもんですね」

八谷にしてみれば、日頃整備員に当たり散らす野口中尉とその部下に思い知らせてやる事ができたわけだが、気分は晴れない。

「もう二度と戻らない、三田村一飛曹たちのことを思うと……」

「戻ってくるさ」

中山は言った。

「……そう言っていた」

……中山はその後、強風の系譜である局地戦闘機『紫電改』を駆り、撃墜記録を重ねた。

そして1945年8月15日。

玉音放送により、終戦が国民に伝えられた。

そして、日本は新たな苦難の道を歩むこととなる。

中山はGHQへの召喚を受けるが、戦犯逮捕は免れ、八谷と共に鉄道技師の仕事に就いた。

やがて彼にも子供が生まれ、日本も少しずつ光を取り戻してきた。

それから中山は暇を見つけては、近所の港へと足を運んだ。
海には沢山のカモメが飛んでいる。

どれが三田村や奈津江たちは、中山にも分からなかった。

伴侶 - 水上戦闘機『強風』（後編）（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

強風は、戦闘機としての設計自体は悪くなかったと言えます。

『紫電』『紫電改』の元となったことも、その根拠の一つです。

しかし「下駄履き」の水上機では、敵戦闘機に対抗できない時代に
実戦投入されることになってしまいました。

全ては、軍上層部の見通しの甘さが原因でしょう。

ですが、この機体には何か惹かれるところがあるような気がします。

さて、次回は四式戦闘機『疾風』。

敵であるアメリカ軍からも称えられた、日本陸軍最強の戦闘機です。
できあがるまで時間はかかるかと思いますが（汗）、どうかお楽しみ
みに。

グレムリン - 四式戦闘機『疾風』 - (前編) (前書き)

第二章は陸軍の四式戦闘機、通称『疾風』です。

グレムリン - 四式戦闘機『疾風』 - (前編)

中島 キ84 四式戦闘機『疾風』

乗員一名

最大速度 624 km/h

武装 20 mm機関砲×2、12.7 mm機関砲×2

中島飛行機製戦闘機の最高傑作とされる機体。

海軍の『紫電改』と比べると保守的な設計ではあるが、高性能エンジン『ハ45』（海軍名『誉』）の搭載により、日本陸軍機としてはなかなかの重武装が実現している。

速度も陸軍最速であり、航続力・格闘戦能力・上昇力も兼ね備え、米軍からも『日本最優良戦闘機』と評された。

ハ45発動機は不調が多いことで知られたが、苦戦を強いられていた中国戦線では制空権を一時的とはいえ回復させ、フィリピン戦でも戦果を挙げた。

本土防空戦や沖縄戦にも投入されたが、ベテランの搭乗員を多く失っていたこともあって戦果ははかどらず、多くが特攻機として散っていた。

なお、海軍の『紫電改』などは正式名称であるが、陸軍の場合『疾風』や『隼』などの名は愛称である。

… … …

「やっちゃんは、大きくなったら飛行機乗りになるの？」

「そうさ。世界中を飛び回るんだ」

少年は言う。

「じゃあ、あたしも乗せてよ！いいでしょ！？」

「ああ！二人で一緒に飛ぼうな！アメリカやイギリス、全部の国に行くんだ！」

「約束だよ、ねっ！」

… … … …

1945年 日本

米空軍の司令官がヘイウッド・ハンセルからカーチス・ルメイに変わり、B-29『スーパーフォートレス』による都市部への無差別絨毯爆撃が行われるようになった。

陸・海軍共に、総力を挙げて迎撃戦を行うものの、B-29に追いつくのも至難の業であり、さらに重装甲を誇るB-29を撃墜するのは難しい。

日本がレーダーの開発に後れを取っていたことも、この状況に繋がったと言える。

そして、ルメイの『日本焦土化作戦』が進んでいった。

「畜生、また故障だぞ　！　何回目だ　！　？」

戦闘機の前で、操縦士が悪態をついた。

若い整備員と、中年の整備班長がエンジンを眺めていた。

「ね、俺の整備不良じゃないスよ」

「わかってるさ小石川、今回は儂もチェックしたからな」

整備班長が唸る。

「いつも出撃直前でエンジンがかからなかったり、タービンが割れてたり……」

「グレムリンでもいるんですかね」

小石川整備伍長が言った。

「ぐれむりん　？　何だそりゃ　？」

「先の大戦のとき、英国の軍隊に出たらしいんスけどね。飛行機とかに悪戯して、不調を起こさせる妖怪っすよ」

「物知りだな、お前。その訳のわからん妖怪が、英国から日本まで来やがったのかなあ」

「馬鹿馬鹿しい　！」

操縦士は怒鳴った。

「整備不良ではないのなら、原因をしっかりと明らかにしろ！ 妖怪のせいにして誤魔化すなんて許さないからな！」

そう言っただけが格納庫から出て行くと、小石川はため息をつく。

「片倉少尉、怒り狂ってますね」

「そりゃ、B公の迎撃に出ようとしたら、自分だけ故障で居残り、なんてことが三回もあればな……」

「……四式戦のハ45発動機……問題が多いのは確かですけど……」

小石川は、四式戦闘機を見上げた。

「俺にはどうも、こいつが出撃するのを嫌がっているような気がします」

「そりゃあ僕も同意見だ」

班長が頷く。

「片倉少尉は、妙に死に急いでる気がするな」

「震天制空隊にいたんらしいんすよ、前まで」

B-29迎撃のため、武装を排除した機体による体当たり……即ち空対空特攻を行う部隊まで組織された。それが震天制空隊である。

しかしB - 29に接近することすら困難であり、さらには二回連続で体当たりを受けながらも、硫黄島まで帰還したB - 29もいた。やがて昼間の爆撃にはP - 51『ムスタング』などの護衛機が同伴するように、次第に空対空特攻は行われなくなってきたのだ。

「運良く生き残れた……とは思えないのでしょね、片倉少尉」

「まあな、仲間が死んで自分一人残ったとなれば……」

班長はため息を一つ吐いた。

「戦闘機乗りの命つてのは、こんなに軽いもんなのかねえ……」

……

翌日。

先日に出撃した四式戦闘機『疾風』は十六機。
還ってきたのは十二機。

すでに旧式化している一式戦闘機『隼』や、上向き砲を装備した二式複座戦闘機『屠竜』も出撃したが、数機が撃墜されている。

撃墜したB - 29は二機。

爆弾を投下して身軽になったB - 29は、西風に乗って飛び去るため、追撃が困難なのだ。

「……いつも俺一人だけ、生き残っている」

格納庫へと歩きながら、片倉泰志少尉は呟いた。

両親。

幼馴染み。

戦友。

みな、彼一人を残して死んでいった。

「みんな死んでいったのに……何故俺だけが生かされているんだ……
……！？」

噛みしめた唇から、血がにじみ出る。

次こそは必ず出撃し、B-29に突っ込む。

それだけを考えていた。

搭乗機の様子を見ておこうと、格納庫に入る。

彼の四式戦闘機は、静かに彼を待っていた。

しかし……

「……ん？」

飛行機の上で、何かが動いている。

十歳くらいの子供が、エンジンの上に乗っていた。

「おい、何をしている！？」

片倉が叫ぶと、子供は四式戦から飛び降りた。

そして一直線に、片倉のいる出口の方へ駆け出す。

片倉が捕まえようと手を伸ばすが、子供は脇をすり抜けて、外へと逃げた。

「待て！」

片倉も外へ出る。

しかし、子供の姿は何処にもなかった。

「……何処へ行きやがった……？」

辺りをきよろきよろと見回していると、横から声をかけられた。

「少尉、誰かお探しっスか？」

「おつ、小石川か。今ここに、子供がいなかったか？」

「子供っスか？ そんなもんがこの基地に来るわけないっしょ」

小石川が当然のように答えると、片倉は唸った。

「確かにいたんだ。俺の四式戦に何かしてやがったんだよ」

「子供が、っスか？」

「ああ……待てよ！」

片倉はポンと手を打つ。

「お前が言ってた、グレ何とかって妖怪だ！」

「グレムリン、っスか？」

「そうだ！ あの餓鬼がその妖怪グレムリンに違いねえ！ 見つけ出して成敗してやる！」

小石川は「この人とうとう、頭がどうになつたか？」などと思つたが、無論口には出せない。

「小石川！ お前も探せ！」

「俺もつスカ！？」

「当たり前だ！ お前が整備した飛行機を、あの妖怪が故障させてるんだぞ！ 悔しくないのか！？」

「いや、あの……そもそも本当に妖怪なんスか？ 少尉が見たのは……」

「見つけたら知らせろ！ いいな！」

そう言うのと、片倉は滑走路の方へ走っていった。

「……………何処を探すつもりなんだろう……………？」

……………基地内に、飛行機を故障させる妖怪が出る。

話を聞いた者は面白がるか、「アホか」と呆れるかのどちらかだつた。

しかし、格納庫近くで子供の泣き声を聞いたとか、朝起きたら頭と足の位置が入れ替わっていたとか（寝相が悪いだけ）、夜に階段を昇ると、降りるとき段数が一段減っているとか（降りるときに一番上の段を数え忘れているだけ）、一日に三回カラスの糞を脳天に喰らったとか（運が悪かっただけ）、次第に怪現象（勘違い）に遭つたという整備員・搭乗員たちが増えてきた。

片倉の機体は相変わらず故障を頻発している。

戦隊長からも「妖怪の話はひとまず別として、片倉少尉搭乗機故障の原因を究明するように！」とお達しが出た。

結果、隊員総出で妖怪探しが始まり、片倉の四式戦闘機には24時間体勢で見張りがつくことになった。

「……戦闘機も妖怪には適わねえか」

「……俺も、まさかこんな大事になるとは思わなかったつスよ」

整備班長と小石川が、ボロの椅子に座って見張りをしていた。

片倉の四式戦の機首や風防には、「妖怪退散」などと書かれた札が大量に貼られている。

それを見て、二人は深くため息を吐いた。

「こんなもん貼り付けただけで、妖怪が来なくなるんスかね？」

「俺に聞くな。第一その妖怪ぐれむりんとかいうのには、お前の方が詳しいんだろ？」

「いや、詳しくはないつスよ。ただ聞いただけで」

「しっかしこの札、下手くそな字だな。誰が書いたんだ？」

「小隊長が面白がつて書いたみたいつスよ。軍人がこんな呑気でいいんスかね？　しかもこの戦況で……」

「まあ、いつ死ぬか分からない身だからな。笑える思い出が欲しいんだろつよ」

班長は立ち上がった、四式戦の主脚を撫でた。

「……この四式戦は確かに陸軍最速だが、上の連中が中島に無茶な量産命令を出したせいで、できが粗い。しかも人手不足で学生が組み立ててるもんだから、尚更故障も多い。B公を何機撃墜してもキリがねえ。負け戦だ」

小石川は黙ってそれを聞いていたが、ふと格納庫の入り口辺りを見た。

何かの気配を感じたのだ。

小さな影が、そこにあつた。

「……子供……！？」

小石川が呟いた瞬間、その影は消えた。

目を擦ってもう一回そこを見るが、もうそこには何もいない。

「どうした？」

班長が尋ねる。

「いえ……気のせいかな……」

……次の夜。

B-29の編隊が来襲した。

「小石川、まわせ！」

片倉が四式戦の操縦席に乗り込み、小石川がエンジンをかける。

「……今回は大丈夫そうだな」

片倉は言った。

小石川が離れ、片倉の四式戦は滑走路を走っていく。

「……還つてはこない、だろうな……」

四式戦が離陸する。

他の機体も次々と夜空へと飛翔した。

「片倉少尉……俺は死なせるために整備してるんじゃないってのに……」

……日本軍戦闘機隊は、B-29のいる高度まで上昇するだけで精一杯だ。

そして、攻撃のチャンスは少ない。

「墜ちろーッ！」

B-29の巨大な胴体に、20mm弾を発射する。

しかし、B-29からの射撃も激しく、簡単には接近できない。

護衛戦闘機がないのが、せめてもの救いだった。

この高空では電熱服を着ていても、凍えるような寒さだ。

B-29の機内には暖房が完備され、コーヒーを飲みながら爆撃できるのに対し、日本軍の戦闘機戦闘機乗りたちにはかなりの悪条件下での戦闘が強要されたのである。

「クソが……クソがーッ　！！　」

爆弾倉が開き、速度が落ちた瞬間を狙い、片倉はエンジンを全開にして突入する。

機銃の弾が数発、風防に穴を開けた。

B - 29の腹目がけて、機体ごと突っ込もうとした、その瞬間。

「　！！　」

目の前に、あの子供が立っていた。

否、宙に浮いていた。

両手を広げ、片倉の眼前に立ちはだかっていたのだ。

片倉は反射的に操縦桿を引く。

体当たりのコースからは外れたが、次の瞬間には機体が激しい震動に襲われた。

B - 29のプロペラの後流に巻き込まれたのだ。

操縦不能になり、B - 29の胴体へ衝突する寸前、殆ど割れていた風防が音を立てて外れた。

伸びてきた小さな手を無意識に掴み、片倉の意識は闇へと沈んだ。

グレムリン - 四式戦闘機『疾風』 - (前編) (後書き)

続きは後編です。

グレムリン - 四式戦闘機『疾風』 - (後編) (前書き)

後編です。

グレムリン - 四式戦闘機『疾風』 - (後編)

「くそつ、何処へ降りたんだ？」

日本兵達が、森の中を搜索する。

片倉少尉の機体がB-29と衝突したが、僚機によって片倉がパラシュートで降下したのが確認されたのである。

「無事ですかね？」

「さあな。確認した南少尉の話じゃ、プロペラの後流に飛ばされてぶつかつた衝撃で宙に放り出されたみたいだつてことだから……怪我ぐらいはしてるだろう」

脱出に成功しても、生還できるとは限らない。

パラシュートで降下した日本軍の操縦士が米兵と間違えられて、民間人に虐殺されたという事例もある。

先頭に立つ兵士が、辺りを見回す。

その時、横から足音がした。
すぐ近くだ。

兵士は反射的に小銃を向けるが、そこにいたのは十歳前後の子供だった。

「なんだ、迷子か？」

緊張が解けた兵士が尋ねると、その子供は首を横に振った。

「何処から来たんだ、坊主？」

「…………隊長、この子は女の子のようですよ」

「何！？」

確かによく見れば、顔つきや体つきが、どちらかというとなの子に近い。

しかし袖のないシャツに半ズボンという、どう見ても男にしか見えない服装だった。

その少女は、左手で木々の向こうを指さした。

兵士達はその方向を見ると、何か大きな布が見えた。

「！ 片倉少尉！」

パラシュートが木に引っかかり、その下に、片倉の体がぶらさがっている。

兵士達が駆け寄り、まだ息があるのを確かめた。

……少女はいつの間にか、姿を消していた。

……………

闇。

右を見ても左を見ても、闇一色。

「片倉さん、靖国で会いましょう」

亡き友の声が聞こえた。

「靖国で会おう」

「靖国で会おうな」

- 肥後 ! 松本 ! 村井 ! -

震天制空隊にいた頃。

同じ部隊の仲間達は、次々と敵に体当たりをしていた。

しかし、片倉は死ななかった。

エンジン不調で、飛び立てなかったのである。

仲間達は散華し、自分一人生き延びた。

耐え難かった。

皆で散るはずが、自分一人が生き残り、今ものつのと生を貪っている。

「今までありがとうな、片倉。靖国で会おう」

- 逝くな ! 逝かないでくれ ! 俺も…… ! -

「……やっちゃん」

突然聞こえた少女の声に、片倉ははっとした。

「やっちゃんは、飛行機乗りになれたんだね」

- - 玲子…… ! - -

事故で死んだ幼馴染みの名を、片倉は呼んだ。

いつも男の子のような格好をして、片倉を筆頭とする近所の悪ガキ達と共に、町中を駆け回っていた少女。

片倉が弟分の肥後を助けて、隣町の悪ガキ五人を相手に闘ったときには、他の誰よりも早く玲子が駆けつけてきて、二人ともボロボロになりながらも全員を叩きのめした。

いつまでもこれでは嫁の来手がない、と親は嘆いていたようだ。

片倉が「俺の嫁にならなくてもいいぞ」と言うと、笑いながら片倉の頬を抓った。

「やっちゃん、どうして死のうとするの？」

- - 俺だけ……俺だけ生き残れるかよ - -

「生きていちゃ駄目なの？　どうしても死ななくちゃ駄目なの？」

- - みんな俺を置いて、逝っちゃったじゃないか。お前も、肥後たちも…… - -

「私だって生きていたかった。やっちゃんのお嫁さんになりたかった」

- - お前…… - -

「死ぬのは駄目だよ！生きて！私が掴めなかった幸せ、やつちゃんに掴んで！」

……唐突に、闇が晴れた。

目の前にあるのは、基地の医務室の風景。
片倉はベッドに寝かされていた。

「おお、気がついたか」

白髪の軍医が言った。

「……先生……」

「無茶をしたものだな、片倉少尉」

その時、医務室の扉がバタンと開いた。
戦隊長だ。

片倉は起き上がって敬礼をしようとするが、体に激痛が走り、顔を歪ませる。

「そのままで良い、片倉少尉」

戦隊長は片倉に歩み寄る。

「少尉、貴様に一つだけ問う。貴様は戦闘機乗りの誇りを何と心得

るか？」

「……敵機を……撃墜することです」

「馬鹿者がッ！」

戦隊長は怒鳴った。

「生還である！ 敵機に弾を撃ち込み、何度でも生きて還ってくる！ それでこそ真の操縦士である！」

「！」

「B-29の空爆で死ぬのは、戦と関わりのない女子供ばかりだ。それを守るのが軍人の役目。そのためには、たった一回の出撃で散る体当たりなど論外だ！」

それだけ言つと、戦隊長は片倉に背を向ける。

「少尉、貴様が死んでも何も変わらん。何も良くならん。この戦は先が見えた。なればこそ生き残れ！ 散っていった者達へのためにもな！」

戦隊長は退室し、荒々しく扉を閉めた。
数秒間、病室に沈黙が流れた。

「さすが戦隊長だのう。かつて激戦地ラパウルにいただけのことはある」

軍医が言う。

「……先生」

「何かね？」

「俺はいつ、飛べるようになりますか？」

「……三週間、と言ったところか」

片倉は目を閉ざした。

瞼の下で、彼の瞳は新たな信念の光を宿していた。

……そして三週間後の夜。

B-29の大編隊が、この日も来襲した。
戦闘機隊が、迎撃に出る。

「ありがとうな、小石川。それに班長」

新たな四式戦の操縦席で、片倉が言う。

「心を込めて整備してくれた機体、必ず返すぜ」

「少尉も一緒に帰って来なきゃ、整備した意味ないっすからね？」
「」

小石川の言葉に、片倉はニヤリと笑った。

エンジンが回り、四式戦が滑走路を走る。
そして、夜空へと飛び立っていった。

「……まだ怪我が治ったばかりなのに、大丈夫っスかねえ？」

「さあな……だが」

班長は微笑を浮かべる。

「あいつの目、変わってきたぜ」

夜空を鋼鉄の巨鳥が渡っていく。

B - 29『スーパードフォートレス』……超空の要塞。

片倉の四式戦はエンジンを全開にし、斜め下から巨大な機影を追う。
B - 29は爆弾倉の中に、燃料タンクを積んでいる。
そこに火を噴かせてやれば、墜とせる。

問題は、B - 29からの防御射撃を如何にかわすか、だ。

「肥後……松本……村井」

操縦桿を握りながら、片倉は呟いた。

「悪いな……俺は靖国へは……お前達の所へは行けない」

機銃弾を巧みに交わしつつ、射程距離まで接近していく。
エンジンなどに少し火を噴かせたくらいでは、すぐに消火されてしまふ。

爆弾倉へ確実に撃ち込める距離まで、追尾するのだ。
機銃弾が、風防を掠めた。

前回とは明らかに違う感情……即ち恐怖がわき上がってくる。恐怖。

つまり、生きることへの執着。生還するという、信念の証。

そして、片倉は限界まで接近した。射程圏内だ。

「この音がお前達への、鎮魂歌だ！」

片倉がトリガーを引くと、20mm弾と12.7mm弾が、黄色い帯のように吐き出される。

B-29の装甲に、いくつかの弾痕ができた。

四式戦にも、凄まじい機銃の雨が降り注ぐ。

だが片倉は、B-29目がけて全力で飛びながら、攻撃を止めなかった。

「うおおっ！！」

轟音と共に、空中に紅い花が咲く。

機体が炎を噴き、B-29は真つ二つに折れた。

金属片が炎を反射し、蛍火のように宙を舞う。

「……やった」

片倉はポツリと呟いた。

そして、燃えさかりながら闇の中を墜ちていく、B-29の姿を見た。

「お前達アメリカ人も……生きて国へ還りたかっただろうな。だが、

俺は……」

この戦争は先が見えた。
日本は負ける。

しかし。

「玲子……あの頃の、俺やお前みたいな子供を……一人でも多く、
護る！」

燃料は、残り僅か。

片倉は基地へと機首を向けた。

B-29を追尾するため、燃料を最低限の量に減らし、機体を軽く
していたのだ。

残ったB-29は、もう追いつくことのできない距離へと飛び去っ
ている。

夜空の中で、玲子が笑ったような気がした。

片倉は操縦桿を握る手に、力を込める。

「片倉泰志……これより帰還する！」

……B-29の空爆により、日本各地が焦土と化した。

四式戦闘機『疾風』は、沖縄戦などで数多くの機体が特攻機として
投入されることとなる。

片倉は四式戦を駆り、風の如くB - 29の撃墜に奮闘した。

操縦士の誇りと、幼馴染みとの約束を胸に。

グレムリン - 四式戦闘機『疾風』 - (後編) (後書き)

さて、お読みいただいてありがとうございます。

『疾風』は『紫電改』とかと比べて、機種として「これは」という特徴は無いように思います。

新機軸の組み込まれた紫電改と比べ、四式戦闘機『疾風』はシンプル故の強さ、と言ったところでしょうか。

今回は零戦の正当な後継機となるはずだった、一七試艦上戦闘機『烈風』です。

実戦に参加できなかったため評価が分かりますが、これも好きな機体です。

受験などもあり、今回はかなり遅くなるかもしれませんが、どうかお楽しみに。

鎮魂歌 - 艦上（局地）戦闘機『烈風』（前編） - （前書き）

さて、今回は実戦に間に合わなかった幻の傑作機『烈風』。
舞台は二次大戦中ではありません。

鎮魂歌 - 艦上（局地）戦闘機『烈風』（前編） -

三菱 艦上（局地）戦闘機『烈風』

乗員一名

最高速度624・1km/h

武装 20mm機銃×4（翼内）

（上記の性能は、正式採用型のA7M2『烈風一型』のもの）

零式艦上戦闘機の後継機に当たる機体。

1942年、一七試艦上戦闘機の名で、三菱重工に開発を命令された。

海軍から三菱に課せられた要求は、高度6000mにおいて6389km/h以上の速度、更に零戦に匹敵する運動性能という過酷なものだった。

使用するエンジンを巡っての海軍と三菱の論争や、工場が零戦、一式陸攻の生産で一杯だったなどの理由により開発が遅れ、海軍の指定したエンジン「NK9」（後の「誉」発動機）を搭載したA7M1が完成したのは、開発命令から二年後の1944年だった。

A7M1『試製烈風』の性能は、海軍の要求値を遙かに下回ったため、不採用が決定。

「三菱は川西局地戦闘機『紫電改』のライセンス生産を行え」との命令を不満に感じた技術陣は、海軍からの命令無しで自社製エンジン「八四三」に転換したA7M2を完成させ、試験飛行を行う。

結果ほぼ要求性能を満たし、海軍は打って変わって本機を称賛、局地戦闘機に改め『烈風一型』として正式採用を決定する。

しかし実戦には全く参加できずに終戦を迎えることとなり、残った『烈風』の一部はアメリカへ引き渡されたようだが、全機行方不明となっている。

…
…
…
…

「コントロール、こちらムラサメ3。下方に目標視認、行きます」
パイロットスーツに身を包んだ、若い女性。
ヘルメットに『三つ巴』のマークが描かれている。

「静恵、行くよ」

《はい、二尉！》

二尉と呼ばれた女性は操縦桿を倒して反転、下方のアメリカ軍機目がけて急降下を開始した。
相手はF-15『イーグル』、こちらはすでに旧式化しているF-4『ファントム』。

「そおーれっ！」

…
…
…
…

「うわぁっ　！？　」

突然ダイブしてきたF-4『ファントム』に、リリー＝グッドウィ
ン空軍中尉は度肝を抜かれた。
咄嗟に機体を横転させ、射線进行かわす。

「な、なんて飛び方を……　！　？」

リリーの背中に冷や汗が流れた。

「もうっ……　『日本の女は奥ゆかしいヤマトナデシコ』、なんて言
ったのは誰よ　！？　」

日の丸の描かれたF-4は、引き起こしてからスプリットSを行い、
リリーの後ろを狙う。

「舐めるんじゃないわよ　！　」

F-15の圧倒的なパワーにより、F-4を引き離す。
そして、太陽に向かって上昇する。

「チマチマした旋回戦じゃ、日本人の方が上でしょけどね……
！　」

F-4が食いついてきたが、太陽に飛び込んだF-15を視認でき
てはいない。

太陽光線によりレーダー波も攪乱されているだろう。

リリーは横へ抜け、横転降下してF-4の後ろを取った。

視認できるようにするため、太陽と同じ軸線にならないよう、やや

左に着く。

その時、F - 4は方向転換した。

（相手が見えなくなったときは自分も位置を変える……賢いやり方だけど、もう遅いわ！）

F - 4は馬力ではF - 15に適わない。

リリーは斜め上から、確実に命中する距離まで食らいつく。

「もらった！」

だがその瞬間、目の前のF - 4がガクンと減速した。
リリーのF - 15はその上を追い越してしまう。

「！やばっ……！」

直後、軽い衝撃音が数回。

F - 4のペイント弾が命中したのだ。

「……あうー」

リリーはがつくりと頂垂れた。

彼女の負けだった。

模擬空戦終了後、航空自衛隊二等空尉・篠原紗絵香は愛機の手入れをしていた。

マクドネル・ダグラスF - 4『ファントム』は旧式化が進み、アメリカ軍ではほぼ完全に退役、航空自衛隊でも徐々に退役しつつある。そんな中、操縦士・ナビゲーター共に女性であるこの機体は、模擬

空戦で数々の好成績を残してきた。

「さすが篠原さんですね。最初からあそこでスピードブレーキと車輪を出して、減速するつもりだったんですか？」

ナビゲーター・三浦静恵三尉が尋ねる。

紗絵香は表情を変えずに答えた。

「相手の『流れ』を読んで、相手の有り余る力を利用すれば、1の力で10の力を制することも可能、ってことね」

「はあー、合気道とかの考えを、空戦にも応用したんですね」

その時、近づいてくる者がいた。

リリー「グッドウィン中尉だ。」

「ハロー。今回は私の負けだわ」

リリーが言う。

「最初の突っ込み、うちの部隊でかわせた奴はいなかった。貴女もいい腕してるわ」

紗絵香も英語で答えた。

「ありがと。それにしても、あれだけの腕があるのに、どうしてF-15に乗り換えないの？」

「機種転換の話も来たけど、断ったの」

「どうして？」

「デザインの好み」

「はあ？」

きつぱりと言い切った紗絵香に、リリーは呆れた。

「F-15『イーグル』はコンピュータで設計されただけにまとまってるけど、正直味気ない。ファントムの方が人間的なラインを出してる」

「日本人って、見た目よりも機能を重視するんじゃないかと思ってたけど……」

「私の場合、ただ強ければいいわけじゃないと思うからね」

紗絵香は微かに笑みを浮かべた。

「それにイーグルは単座だから、少し寂しくて」

そう言っただけで静恵の肩に手を置くと、リリーは納得したような顔をした。

「ま、とにかく……次に闘うときは負けないわよ、サエカ」
「シノハラ中尉」

「こちらこそ。リリー」
「グッドウィン中尉」

女性は体重が軽い分、Gによる体への付加が男性より少ないという説があり、現在女性パイロットは増加傾向にあるという。

一ヶ月後。

スクランブル要員の待機中に、その知らせは舞い込んできた。

「おいみんな、これ見てみるよ！」

パイロットの黒田二尉が、卓上に新聞記事を広げる。

隊員達がその記事をのぞき込むと、一機のレシプロ戦闘機の写真が載っていた。

逆ガルの大きな主翼に、紡錘形の胴体。

そして、翼に見える四つの20mm機銃。

「これは……『烈風』？」

紗絵香が言った。

「そう、局地戦闘機『烈風一型』。昨日、L市にあった廃工場の地下で見つかったんだってよ！」

「マジかよ！」

「終戦後に残った烈風って、アメリカに引き渡すだの引き渡せないだのゴタゴタの中で、行方不明になっちまったんだろ！」

「ああ。ところが今になって、ほぼ完全な保存状態で発見されたっ

てわけだ！　いつ作られたものかははっきりしないみたいだが、正式採用タイプの烈風――型で、完成しなかったと言われている20mm機銃四丁搭載型ってことだ」

「事实は小説よりも奇なり、ってやつか」

「零戦の正当な後継機……一度飛んではいるところを見たいよなー」

ルーム内が沸く中、紗絵香はいつも通りのポーカーフェイスで、写真を見つめていた。

「二尉、凄いですよね。実戦に参加しなかった機体なんでしょ？」

「……………格好いいね」

静恵の言葉に、紗絵香はそう答えた。

「格好いいよ、これ」

……………その後、烈風は点検・修繕を行われ、何処かの博物館か基地に展示されることになると思われた。

しかし、紗絵香たちにとっては思いもかけない事態が起こった。

「篠原二尉」

基地司令が紗絵香を呼ぶ。

部下達から「恵比寿様」と呼ばれる、優しげな顔立ちの中年男性だが、彼も元はF-4のパイロットである。

「何でしょうか」

「先日、艦上戦闘機……いや、局地戦闘機『烈風』が見つかったというニュースは知っているな？」

「はい」

「乗ってみる気はないかね？」

司令のその言葉に、部屋にいた誰もが驚愕した。
紗絵香も目を見開く

「あの烈風の修理は、大して難しくないそうだ。そこで、米空軍との間でちょっとしたイベントの話が持ち上がったのさ」

「イベント？」

「烈風と米軍機の模擬空戦だよ。対戦相手は以前に君と模擬空戦を行った、リリー＝グッドウィン空軍中尉が候補として挙がっている」

室内に驚嘆の叫びが響き渡った。

「グッドウィン中尉の機体は？」

「P-51だ。『ムスタング』だよ」

ノースアメリカン P-51『ムスタング』。

第二次大戦において、最強と呼ばれた制空戦闘機である。

「すげえ、烈風VSMスタング、夢の対決じゃないか！」

「烈風の性能が見られるってわけですね！」

熱狂する隊員達。

紗絵香は少しの間思案していたが、程なくして答えた。

「是非、やらせてください」

……こうして、遅すぎた名機が21世紀の空にて戦うこととなった。

そして二ヶ月後、基地に烈風が運び込まれる。

それは紗絵香のF-4と並んで、格納庫内に置かれた。

紗絵香は他の隊員達と共に、格納庫へと足を踏み入れる。
烈風と対面だ。

逆ガル翼の、やや大型の戦闘機が、F-4の隣にあった。

「……！」

紗絵香は目を見開いた。

そして寒さに凍えるように、自分の体を抱きしめる。

「おおー、さすがに零戦の後継機。貫禄あるよなあ」

「やっぱり零戦の面影がありますよね」

他の隊員達が見とれている中、静恵が紗絵香の異変に気づいた。

「篠原さん、どうしたんですか？」

心配そうに尋ねる静恵に、紗絵香は烈風から目をそらさずに答える。

「……大丈夫、何でもない」

……この時、彼女が烈風から受けたその感覚。
気のせいとはとても思えなかった。

そして紗絵香は、自分がこの機体を操縦するということに、得体の
知れない恐怖と、それ以上の興味を覚えた。

鎮魂歌 - 艦上（局地）戦闘機『烈風』（後編） - （前書き）

後編でございます。

鎮魂歌 - 艦上（局地）戦闘機『烈風』（後編） -

……敵は……

……敵はどこ？……

……私の敵は、どこ？……

………

「ん……」

紗絵香は目を覚ました。

『烈風』と出会って以来、この夢が付きまとっている。
暗い空。

光を失った太陽。

その下で、問いかけてくる少女。

「……ふう」

溜め息一つ吐いて、紗絵香は起き上がった。

数日間試験飛行を繰り返し、烈風の操縦桿も手に馴染んできた。それと同時に、烈風という機体の本質が、少しずつ見えてきた気がする。

初めて烈風と相対したときの、あの感覚の正体も……。

… … …

「篠原、最近変じゃないか？」

黒田二尉が言った。

「なんかぼーっとしてたり、考え込んでいたり……」

「そうですね、何か……『烈風』を見てから、何となく様子がおかしい気がします」

静恵も頷く。

「明日には、全速飛行をやるんだろ？ 大丈夫なのか？」

「篠原二尉ならきつと……」

その時、パイロットルームのドアが開いた。
紗絵香だ。

いつも通りのポーカーフェイスだが、どこことなく疲れているように

見える。

「二尉、お疲れ様です　！　……どうですか　？　烈風の調子は？」

静恵の問いに、「うん」と曖昧に返事をして、ポットに入っていたコーヒーをカップに注ぐ。

「……おい篠原、お前最近妙だぞ　？」

「うん」

「……いや、「うん」じゃなくてだな……」

「あんた達さ、戦闘機を操縦しているんじゃないくて、『戦闘機に操縦されている』ような感覚になることって、ある　？」

唐突に尋ねられ、黒田と静恵は一瞬思考が止まった。

「えーと……そう言えば、昔よくそういう感覚になったことはあったな。操縦席の計器に押しつぶされそうで、凄い圧迫感で……確かに、機械に動かされているような気分にはなったな」

「そうそう、機械仕掛けの棺桶みたいに感じました」

紗絵香は腕を組み、何やら思案にふける。
そして、口を開く。

「機械からの圧迫感……とは、少し違うのよね」

「……烈風を操縦している時、そう感じたってことか？」

「何かもつと別な……そう……変な感じの……」

「分かるように話せよ、分かるように！」

黒田が呆れたように言う。

「……明日、全力であの機体をぶん回してみないと、はっきりとは分からない」

「どういう意味だ、そりゃ？」

「戦闘機なんだから戦闘速度でぶん回してみないと、機体の本質は分からないもんでしょ？」

「そりゃ、まあ……」

「じゃ、シャワー浴びてくる」

紗絵香は飲み終わったコーヒークップを置くと、退室した。

黒田は溜め息を吐いた。

「……三浦、よくあいつの後席やってられるな」

「……私も最初は、どう付き合えばいいのかわからなかったですけど……」

静恵は苦笑した。

「気づいたときには、互いに信頼していました。不思議な人です」

……そして翌日。

紗絵香は烈風の操縦席で、紗絵香は離陸準備をしていた。
操縦桿を握り、少しの間目を閉ざす。

「……」

整備員がエンジンをかけた。

「篠原二尉、離陸します」

《コントロール、了解》

プロペラが回転し、滑走路を突き進む。

そして車輪が離れ、宙に浮き上がった。

車輪を折りたたみ、烈風は蒼穹へと吸い込まれていく。

機体の安定性はいい。

高度をとって、右旋回、左旋回と機体を操る。

「これより、全速水平飛行に入ります」

《了解しました》

二次大戦中のテストパイロットも、こんな気持ちだったのだろうか。
紗絵香はそんなことを考えながら、機体の速度を上げていく。

烈風一型の最高速度は、624・1km/hと記録されている。

現代の高オクタンの燃料を使えば、それを更に上回る記録が出せるかもしれない。

紗絵香の愛機であるF-4『ファントム』の速度とは比較にもならないが、それでも紗絵香が限界に挑もうとしていることには代わりない。

「現在速度、590！」

メーターを見て、紗絵香は言った。

（この烈風は、零戦の後継機……終戦に間に合わず、長い間眠っていた機体……）

操縦桿を通じ、紗絵香の意識は烈風と一つになる。
限界に挑むとき、彼女は機体との一体感を感じるのである。

「610！ 620！」

烈風の速度が少しずつ上がり、やがて記録上の最高速度を超える。

（名機・零戦を継ぐ機体のはずだったのに、戦うことなく敗れた……）

速度計は690km/hを指し、じりじりと動いている。
やがて、ぴたりと止まった。

「……現在速度700.8！ 全速飛行終了！」

《了解しました、帰還してください》

紗絵香は速度を落としていく。
そして突然、操縦桿をぐつと引いた。

機種が上を向き、烈風は上昇する。

コントロールからの声を見殺し、紗絵香はそのまま、烈風を宙返りさせた。

二回、三回と、連続して空中に円を描く。

夢で会った少女は、自分の『敵』を探していた。

長い眠りから目覚め、自分の存在が何なのかを問いかけていた。

「この空にはもう、貴女の敵はいない……」

高度を取り、横転急降下を開始する。

「貴女はもう、兵器じゃないの！」

両手で操縦桿を引き、機体を引き起こす。

操縦桿を通じて、確かに烈風と心が繋がった。

（これでもう、大丈夫……）

紗絵香は自然と笑みがこぼれた。

その後、紗絵香は予定を見殺しでのアクロバット飛行を行ったとして、司令から説教を喰らい、始末書を書くことになった。

それから、しばらくして。

リリースグッドウィン中尉が、烈風の仇敵となるはずだった機体と共に、来日した。

「不思議な光景ですね」

静恵が言った。

格納庫には烈風と並んで、星のマークが描かれたレシプロ戦闘機が置かれていた。

P-51『ムスタング』。

二次大戦最優良戦闘機。

「昔は敵同士だった機体が、同じ格納庫にいるなんて」

「そうね」

紗絵香が頷く。

「今度は勝つわ、サエカ」

リリーが言う。

烈風とP-51の模擬空戦は明日だ。

「お手柔らかにね、グッドウィン中尉」

「リリーでいいわよ、リリーで。階級だって同じでしょ。呼び方は違うけど」

リリーもP-51を数時間飛行させ、操縦には大分慣れたという。

P-51の最高速度は701km/h、旋回性能でも零戦と互角と言われている。

それでも、旧式化していた零戦や一式戦闘機『隼』で、P-51を多数撃墜した操縦士もいる。

最後に物を言うのは、パイロットの腕だろう。

そしてついに、両機が闘う時が来た。

長年議論されてきた烈風の戦闘能力を確かめようと、基地には全国から軍用機マニアが詰めかけ、スタッフ達はその対応に追われていた。

「篠原二尉、離陸します」

《了解、発進どうぞ！》

烈風が滑走路を走り、宙に浮くと、周囲から歓声が上がった。続いて、リリーのP-51も発進する。

二機は旋回や宙返りなどのパフォーマンスを行った後、戦闘態勢に入る。

《コントロールより両機へ！これより模擬空戦を開始する！》

その言葉と同時に、ドッグファイトが始まった。
もつれ合うような旋回戦。

紗絵香もリリーも必死で操縦桿を操り、相手の背後を狙う。

「後ろに静恵がいれば、相手の動きをもっと正確に読んでもくれるんだけど……！」

しかし、このままではいつまで経っても埒があかないことも、二人は当然分かっていた。

互いに相手の動きを読みながら、仕掛けるタイミングを見計らっていた。

「！」

先に仕掛けたのはリリーだった。
わざと紗絵香に後ろをとらせたのだ。

「誘ってるのかな……何をしてくるか……」

紗絵香は追尾しつつ、射撃のタイミングを狙う。
無論、リリーの動きにも注意しながら。

リリーのP-51が機首を上げる。

馬力や上昇性能では、P-51の方があるだろう。

敢えて追わずに、多方向から回り込むか……

紗絵香がそう思った瞬間、P-51がガクンと失速した。

そして驚くほど小さい円を描いて旋回し、紗絵香の背後に回り込む。

「『左捻り込み』！？」

旧日本海軍航空隊に口伝で伝えられたという、必殺の空戦技術。
反転宙返りの最中に機体を大きく捻り込み、一時的に失速させて相
手の背後につく。

追う者と追われる者の立場が瞬時に逆転するという荒技だ。

詳細・実用性共に謎の多いこの技を、リリーはやってのけた。

リリーもまた、以前のままでなかったのだ。

「くっ……！」

P-51の機銃から、ペイント弾が放たれる。

紗絵香は驚異的な反射神経で機体を90度ロールさせ、火線をか
わした。

さらに垂直旋回に移る。

旋回性能に自信のあるP-51は、烈風に食らいついてきた。

「今……だ！」

紗絵香は左手一本で操縦桿を握り、右手をフラップ開閉レバーに伸ばす。

当然だが、旋回中はかなりのGがかかり、片腕で操縦するのは難しい。コンピュータを介さず、操縦桿から直接エルロンやエレベーターなどの装置を動かしていた二次大戦中の戦闘機なら、尚更だ。

しかも日々トレーニングをしているとはいえ、紗絵香は女性だ。苦痛に顔を歪ませ、操縦桿を支えた。

「フラップ……開！」

ガクンとフラップが作動し、それにより烈風は本来の旋回半径の更に内側へと回り込んだ。

そして、リリーの後ろを取った。

「ッ……練習はしたけど、やっぱり辛い……」

紗絵香は機銃の照準を合わせる。

だがその瞬間、リリーの姿が消えてしまった。

「！ 下か！」

紗絵香が機体を捻って旋回すると、やはり下方から上がってきたリリーとすれ違った。

「今度は『木の葉落とし』……日本の空戦技術を、アメリカ人に使われるなんてね……」

リリーは距離をとって旋回する。

すると紗絵香は、反航して正面から挑みかかった。

正を以て合い、奇を以て勝つという孫子の言葉通り、相手の思いも寄らない戦法に出たのだ。

射撃のチャンスはゼロコンマ数秒。

賭けだ。

「いくよ、烈風！」

射程ギリギリに接近し、紗絵香はトリガーを引いた。

20mm機銃4丁からペイント弾が吐き出される。

そして撃った直後、紗絵香は烈風を旋回させて、離脱した。

……烈風にもP-51にも、赤いインクによる弾痕が穿たれていた。リリーも同じタイミングを狙っていたのだ。

紗絵香は微笑んだ。

そして、烈風に一言語りかける。

「…………お疲れ様」

…………零戦の遅すぎた後継機と、二次大戦最強と呼ばれるP-51

『ムスタング』の戦いは、引き分けに終わった。

それ以降、烈風は基地に展示されることとなり、隊員達からも歓迎された。

紗絵香とリリーは固い握手を交わし、リリーの帰国後も手紙を出し合っている。

『絶対に戦場では会わない』ことが、二人の誓いであった。

数日後、紗絵香はパイロットルームで、静恵や黒田らとトランプをしていた。

「今日こそは篠原のイカサマを暴いてやるぜ」

「ふふ、どうかしらね」

紗絵香がいつもイカサマを使っていることは誰もが知っており、そのイカサマを見抜いたら紗絵香に夕食をおごってもらえる、というのがこの基地での特別ルールだ。
しかし、今のところ見抜けた者はいない。

「はい、ロイヤルストレート」

「うわ、マジかよ。変な動き、一切しなかったし……」

黒田が頭を抱えた時、部屋の赤ランプが点灯した。

《緊急事態スクランブル ！ 緊急事態 ！ 国籍不明機が接近中 ！ 》

その瞬間、隊員達はカードを放り出した。

「エンジン回せ ！ 」

「チェックしろ ！ 」

黒田たちが部屋を飛び出す。

「静恵、行くよ」

「はい、二尉！」

……リリーとの模擬空戦以降、あの夢は見えていない。

しかし、烈風の前を通るとき、紗絵香はあの少女の気配を感じる。笑っているように思えた。

（満足してくれた、ってことなのかな）

ヘルメットを被り、F-4『ファントム』のコクピットに入る。
静恵も後部座席に座った。

（この国の空を、また血塗られた空にしては駄目。そうじゃないと、あの子も安心して眠れない……）

滑走路に入り、ジェットエンジンに点火され、離陸を開始する。

《V1！VR！V2！》

「テイク・オフ！」

紗絵香と静恵は、夜空に飛び立った。

黒田と二機で、未確認機へと向かう。

……散っていった戦闘機達は、今は静かに眠っているのか。

それとも、相棒と共に大空を駆ける夢を、見続けているのか。

⋮

鎮魂歌 - 艦上（局地）戦闘機『烈風』（後編） - （後書き）

お読みいただき、ありがとうございます。

どうだったでしょうか。

主人公は自衛隊員、しかも女性……。

好みが別れるかも知れませんが。

さて、烈風が700・8km/hという速度を出したのは、『彩雲』や『紫電改』が戦後米軍に接収され、アメリカの高品質の燃料を使ってテスト飛行を行った結果、日本軍の記録を遙かに上回る速度をたたき出したという実例から、「まあ、烈風なら大体このくらい出たかも？」という速度を予測してみました。
なのでもの凄くいい加減です。

左捻り込みについては、作中に書きましたとおり詳細・実用性共に謎が多いです。

この空中軌道を得意としたことで有名な坂井三郎氏は、空戦に於いてもっとも有効な奇襲戦法に徹し、左捻り込みは一度も使わなかったというのも有名ですね。

とりあえず、リリーの実力もかなり高レベルなものであることを強調するために出しました。

できれば相手はP-51ではなくF8F『ベアキャット』にしたかったのですが、リリーは空軍所属、ベアキャットは海軍機なので断念。

次回が最後になります。

幻と消えた『陣風』ですが、まだ構成が練り切れていません（汗）
今度は本当に時間がかかると思いますが、お待ちいただければと思

います。

長坂坡 - 十八試甲戦闘機『陣風』（前編） - （前書き）

どうも。

「風」シリーズはこの『陣風』が最後です。

しばらく学校の関係ででかけるので、パソコンにさわれません（汗）なので、前編だけでも先に投稿しておきます。

尚、言うまでもないと思いますが、この話は二次大戦実際の作戦などとは一切関係ありません。

長坂坡 - 十八試甲戦闘機『陣風』（前編） -

川西 十八試甲戦闘機『陣風』

乗員一名

最高速度 685 km/h

武装 13 mm機銃×2、20 mm機銃×6

川西が開発していた、高々度戦闘機。

昭和十七年に海軍は、高々度侵攻戦闘機として十七試陸上戦闘機の開発を川西に命じたが、搭載される予定だった三菱製新型エンジンの開発が遅れたため、製作は一時中断。

その後、高空用空冷エンジン『誉』完成の見通しがついたため、十八試甲戦闘機として試作が指示された。

13 mm機銃二挺に20 mm機銃を六挺という驚異的な重武装、そして高度一万メートルで685 km/hという高速性を実現するため、さらに高性能な『誉四二型』（NK9A-O）の完成を待つこととなった。

実現すれば紫電改を超える、帝国海軍最強の戦闘機となったかもしれない。

しかし『誉四二型』の開発は遅れ、日本軍は多数の新型機を開発する余力も失った。

この陣風も木型審査を行ったのみで開発中止命令が下され、幻と消えた。

… … …

暗い部屋の中。

男はベッドに寝転がっていた。

この独房に入れられてから、十日が経つ。

住めば都と言うが、ここの暮らしにも大分慣れてきた。

（やれやれ、銃殺はまだなのかねえ……まあ、どのみちこの戦争は長くないが）

ぼんやりとそんなことを考えていたとき、不意に独房の戸が開いた。

「日下部直衛　！　元倉少佐がお呼びである　！　着替えて外に出ろ　！」

憲兵が叫ぶ。

「ほー、三日前に来たっていう新司令か。俺に何の用だ　？」

「黙れ　！　さっさと着替えろ　！」

「へいへい、つと」

頭をボリボリと掻きながら、軍服を着て身なりを整える。

そして日下部は、別の部屋へ案内された。

部屋のテーブルの向かい側には、初老の軍人が座っていた。

小柄だが目つきが鋭く、百戦錬磨の猛者だと分かる。

「えー、日下部直衛、参りました」

「うむ、とりあえずかけたまえ」

元倉少佐が言う。

日下部が着席すると、少佐は資料を取り出して話し始めた。

「日下部少尉……否、元少尉。ラパウルにてB - 17を一機撃墜、敵戦闘機三十機撃墜……大した物だ」

「お褒めに預かりどうも」

「それにも関わらず、君は米軍捕虜の脱走を見逃したな。そしてその罪により、明朝銃殺されるはずだった」

それを聞いて、日下部は元倉が自分を呼んだ理由が大体わかった。

「はずだった、ということは、銃殺は取りやめになったと？」

「そういうことだ」

「で、代わりに何をやればいいんです？」

「……話の分かる男だな」

元倉は微かに笑い、二枚の写真を撮りだした。

片方には一艘の巡洋艦が、もう一枚には三角形に近い形をした島の姿が写っている。

「これから言うことは最重要機密事項だ。他言は無用。……この巡洋艦は開発中だったものでな、安い部品を寄せ集めて作られた艦で、名前すらついていなかった。しかし先日、『神州』と名付けられ、

ある目的に使われることとなった」

「目的……とは？」

「米軍艦隊の殲滅じゃよ」

「それはおめでたい話ですな」

日下部は笑ったが、元倉は真剣な表情で話を続けた。

「独房に入っていた君は知らんだろうが、先日広島と長崎に、米軍の新型爆弾が投下された。原子爆弾という奴でな、広島も長崎も消し飛んだのだよ」

「消し飛んだって、その新型爆弾ってのはどのくらい落とされたんですかい？」

「一発だ」

「一発！？」

日下部は驚愕する。

それと同時に、日本の敗北を確信した。

「そして、実はな……日本は米国に、無条件降伏することが決まった」

「無条件降伏……」

第三の原子爆弾が投下されるよりは遙かにマシだと、日下部は思っ

た。

とすると、そもそもこの戦争自体、無理があつたのではないか。意味もなく死んでいった戦友達の事を想い、日下部は溜め息を吐いた。

「だが極秘裏に硫黄島へ、第三の原子爆弾が運び込まれていたらしい。そして硫黄島に潜入した我が軍の兵士達が、その原子爆弾を奪い取り、持ち帰ったのだよ」

「……ははあ」

「さらにそいつらは、その原子爆弾を『神州』と名付けたこの巡洋艦に搭載し、米艦隊のど真ん中に特攻するつもりでいるのだ」

「街を丸ごと吹っ飛ばす爆弾なら……まあ、確かに殲滅できるでしょうね。で、米軍は日本を絶対に許さない、と」

元倉は頷いた。

「勘が良いな」

「そのおかげで生き残ってこれましてね。一言多い性格なもので、源田大佐には嫌われちゃいました……」

「それで三四三空からはずされたわけだな」

第三四三海軍航空隊……通称『剣』部隊。

源田実大佐以下、数多くの撃墜王が所属した精鋭部隊である。

局地戦闘機『紫電』、『紫電改』、偵察機『彩雲』が配備され、数多くの戦果を挙げた。

「……で、その『神州』を仕切っているのは誰で？」

「私の同機、都賀という男だ。上層部からの中止命令も無視し、意地でもこの計画を実行しよう」と、このQ島に部下達と共に立てこもっている。今のところ、米軍は気づいていないようだかな」

「まさか俺に、そのとんでもない爆弾積んだ船を沈めろ、とは言いませんよね？」

日下部は戦闘機乗りであり、爆撃や雷撃の経験は無い。

第一原子爆弾を積んだ船を攻撃すれば、自分も爆発に巻き込まれる。

「君には、都賀の元へこれを届けてもらいたいのだ」

そう言って、元倉は一本の通信筒を取り出した。

「この中には、勅書が入っている」

「勅書……ってことは、天皇陛下の？」

「そうだ。如何に奴と言えど、陛下のお言葉とあれば逆らうまい」

続いて、卓上に地図を広げ、その一点を指さす。

「ここがQ島。この基地と往復できる距離だ。ここまで飛んで、勅書を届けてもらいたい。やってくれるかね？」

「断れば予定通り銃殺でしょうな」

「その通りだ」

「しかしその島に至る空路には、百を超える米軍の戦闘機が飛んでいる。海軍最強の『紫電改』でも……どうでしょうかねえ」

すると、元倉は立ち上がり、着いてくるように言った。

二人は飛行場に出る。

独房に入れられるまでは、三十機以上の戦闘機が配備されていたが、それらの姿も見えない。

僅かに、四機の双発夜間戦闘機『月光』が、隅の方に並んでいた。

「……みんな、死にましたんすか」

「零戦は全機、特攻機に使われてしまった。『雷電』や紫電改は別の要所に回された」

そして元倉は、日下部を小さな格納庫へと案内した。
そこには確かに、戦闘機があった。

「！こいつは……！」

明らかに、日下部の見たことも無い機体だった。

主翼には20mm機銃が六挺搭載され、直線的なラインが高速性を予感させる。

「十八試甲戦闘機。正式採用後は『陣風』と呼ばれるはずだった機体だ」

「……つまり、正式採用には至らなかったと？」

「うむ。高々度戦闘機として川西が開発していたのだが、我が海軍もあまり多くの新型を作る余裕が無くなってな。紫電改の高々度型で代替することに決まり、完成する前に開発中止命令が出た……というのは建前で……」

元倉は機体に歩み寄り、近くから見上げた。

「実はな、腕利き操縦士専用の機体として、極々少数の開発が進められていたのだ」

「士気高揚のため？」

「そういうことだ。結局、完成したのはこの機体だけだな。本来なら君が以前までいた、三四三空に渡されるはずだった」

「ふうむ、源田大佐なら……管野さんにこの機体を渡したでしょうな」

管野直。

「猛将」、「管野デストロイヤー」などと渾名される、三四三航空隊のベテラン操縦士だ。

しよっちゅう憲兵を殴り飛ばし、発進時に気に入らない上官のいるテントをプロペラの後流で吹き飛ばしたり、B-24爆撃機の垂直尾翼を自機の主翼で「切断」して撃墜したり、その豪傑ぶりはあまりにも有名である。

源田実大佐は彼のことを大いに気に入っていたようで、管野が三四三航空隊に転属後様々な問題を起こしても、源田は何も咎めなかったという。

しかしその一方で、戦友や仲間を想う気持ちは人一倍強かったといわれる。

「その管野大尉は、八月一日に死亡した」

「あの人まで死んじゃったんですか！？」

「うむ、戦闘中に機銃が暴発してそのまま行方不明となったそうだが、生存は絶望的だろう」

「……なんてこった、あの殺されても死にそうにない猛将が……」

日下部は管野が、相次ぐ戦友の死を、酷く嘆いていたことを思い出した。

そして、死に急ぐかのように戦いに身を投じていたことも。

「……この陣風の性能、そして君の腕なら、米軍の網を突破し、Q島まで行けるかもしれん。頼む、都賀を止めてくれ。あれは……原子爆弾は、この世に存在してはならん物なのだ！」

元倉は深々と頭を下げた。

（仮にも司令官ともあるう者が、一介の操縦士にここまで……）

政治的事情だけではないだろう。

原子爆弾というのは、単に破壊力があるだけの兵器ではないようだ。

「……巡洋艦の出発は？」

「明朝六時だ。『陣風』の調整に手間取り、時間がかかってしまっ

たが……」

「ってことは、夜に行かなければならないわけですね。米軍の夜間戦闘機は質の良い機上電探^{レーダー}を積んでいる。如何に高性能な機体でも、逃げ切るのはほぼ不可能に近い……が」

元倉が顔を上げると、日下部は笑っていた。

「……上等ですね。死ぬにしても銃殺より、操縦桿握ってくたばった方がいい」

「では、日下部少尉……！」

「やりますよ。俺には家族もない。陛下の勅書、必ず届けます」

それを聞いて、元倉は日下部の手を固く握った。

「ありがとう、少尉……」

……その日の夕暮れ時。

発進準備を整えた日下部、そして陣風が、飛行場に立っていた。

「独房に入っていたせいで、少し勘が鈍ったかもしれませんが。まあ、何とかします」

「頼むぞ。そしてできれば、生きて帰ってきてくれ」

元倉と日下部は再び手を握り合った。

日下部が陣風に乗り込み、整備員がエンジンを回す。元倉が離れて、車輪止めもはずされた。

陣風は滑走路を走っていく。

日下部はその操縦桿を握りながら、呟いた。

「……大量の夜間戦闘機が俺を狙い、俺は単機でそのど真ん中を突破する……面白いじゃないか」

陣風は浮き上がり、車輪が折れたたまる。

日の傾き賭けた空に、日下部は飛び立っていった。

ふと、昔読んだ「三国志演義」の一部を想い出す。

一人の男が主君の子を胸に抱え、百万の敵軍の中を単機で突破したという話だった。

そしてその男の名は……

「行くぜ！ 趙子龍の一騎駆けよ！！！」

…

長坂坡 - 十八試甲戦闘機『陣風』（前編） - （後書き）

いかがでしたでしょうか。

三四三航空隊や管野直など、史実の部隊・人物が名前だけですが登場しました。

実物大モックアップが作られたのみで開発が中止された『陣風』です。なので、かなり妄想入ってます（というか、完全に妄想です）。

24日に帰ってきたら、早い内に後編を仕上げたいです。

長坂坡 - 十八試甲戦闘機『陣風』 (後編) - (前書き)

お待たせしました、最終話です。

夜、暇つぶしにぶらぶらと外を歩いているときだった。
基地の兵達が騒ぎだし、「捕虜が逃げた」という叫びが聞こえてくる。

「やあれやれ……」

日下部は興味なさそうに呟く。
すでにこの戦争に対する興味すら、失っていた。
自分の持っている軍刀の意味も、わからなくなってきた。

その時、日下部は近くに人の気配を感じた。

振り向くと、兵士が一人駆けてきた。

しかし、暗闇でよく分からないが、顔は明らかに日本人では無かった。

英語で何か叫びながら、その米兵は日下部を突き飛ばそうとする。
だが、日下部は米兵の手を掴むと、流れるような動きで背負い投げを決めた。

「悪いな、柔術じゃ負け無しなんだよ」

日下部は軍刀を抜いて、倒れた米兵の喉に突きつける。
闇の中、月明かりを反射し白刃が輝き、米兵の顔は恐怖で引きつった。

「……………」

日下部は何を思ったのか、溜め息を一つ吐いて、軍刀で一方向を指

示した。

「……行け。向こうなら逃げられるだろう」

無論、その米兵は日本語が理解できなかった。

おろおろと立ち上がった彼に、日下部は叫んだ。

「行け！」

その言葉に弾かれたように、米兵は日下部の示した方角へ駆けだした。

日下部が刀を納めたとき、背後から声がした。

「日下部中尉！」

振り向くと、そこには憲兵が立っている。

……日下部は拘束された。

……そして今。

日下部は闇を切り裂いて飛んでいる。

米軍のレーダーから逃れるため、海面近くの低空を飛行していた。

Q島まで往復することを考えれば、しばらくは増槽を捨てたくない。そのため、敵夜間戦闘機の目から逃れる必要がある。

「まったく、何で上の連中は、もっと早く電探^{レーダー}を採用しなかったんだ

か……」

1925年に八木秀次、宇田新太郎が開発したレーダーは、それまでの技術に比べると非常に画期的なシステムだった。

しかし日本の学会はこの技術を完全に不要と見なし、後に敵国となる欧米の国家が、日本より先にこの八木・宇田アンテナの技術を用いたレーダーを実用化することになったのだ。

陣風は夜間戦闘機ではないので、機上レーダーは搭載されていない。日下部の戦闘機乗りとしての経験と勘が、生死を分けることとなるだろう。

しばらく飛行したとき、僅かなエンジン音が聞こえた気がした。辺りを見回してみると、暗闇の中、微かに機影が見えた。

双発・双胴型の機体だ。

「……あれは……ペロハチか？」

ペロハチとは即ちP-38『ライトニング』戦闘機のことである。

しかし今日下部に迫ってきているのは、P-38と同様の双胴形態をした、ノースロップP-61『ブラックウィドウ』だった。

毒蜘蛛の名を冠する、重武装の夜間戦闘機だ。

「見つかったみたいだな。目の良い奴だ」

増槽内の燃料は大分減っていたが、まだ切り離さなかった。

相手は双発機……格闘戦ではなく、その高速性を活かした一撃離脱戦法で攻撃してくるだろう。

それを射程ギリギリでかわし、逆に奇襲をかける。

そのためには、気づいたことを相手に気取られてはならない。

「まだまだ……もう少し、もう少し」

ちらりと後ろを振り返りつつ、耳を済ませる。
敵機のエンジン音で、自機との距離を測っていた。

「……よし！」

P - 61 が射撃しようとしたその瞬間、日下部は操縦桿をグッと引き、機体を上昇させた。

P - 61 はそれを追おうと機首を上げるが、日下部はその動きを読んでいた。

宙返りの途中で機体を180度横転させ、水平に戻る。

増槽を抱えているにも関わらず、完璧な機動のインメルマントーンだ。

さらに旋回して、P - 61 の後ろを取る。

日下部が一瞬トリガーを引くと、20mm機銃六挺、13mm機銃二挺が一斉に火を噴いた。

見事命中し、その瞬間P - 61 は炎に包まれて四散する。

「悪いな……」

そう呟いて、日下部は再びQ島へと向かった。

「発射のときの反動はあるが……いい機体じゃないか、お前」

陣風に話しかけた後、ほぼ空となった増槽を捨て、身軽になって低空を飛ぶ。

しかし、Q島まで後少しの距離となり、機首を上げたところで、複数のエンジン音が聞こえてきた。

「ちつ、グラマンかよ……」

グラマンF6F『ヘルキャット』にレーダーを搭載した、夜戦仕様である。

数は三機、日下部の陣風を発見したらしく、左後部から向かってきている。

Q島は近い。

陣風の速力なら、このまま逃げてQ島に通信筒を投下することも可能だ。

しかし、Q島に通信筒を投下するのを見られれば、そこに日本軍がいると知られてしまう。

現在米軍は都賀の計画を知らない。

下手に島を攻撃されたら、巡洋艦『神州』に搭載された原子爆弾が爆発する。

(……ここで墜とすしかないな！)

日下部は反転し、F6F編隊に正面から向かう。

編隊の両側の機体は散開し、取り囲むような動きに入る。

F6Fは多くの米軍戦闘機がそうであったように、一撃離脱戦法を主にして戦った戦闘機だ。

しかし、F4U『コルセア』などと比べ、格闘戦もある程度はこなせた。

正面の機が、六門の12.7mm機銃を撃ってくる。

「そら！」

日下部は機体を横転降下させた。

暗闇の中でいきなり急降下するとは思わなかったのだろつ、F6F

のパイロットは陣風を見失う。

「電探だって死角があるんだからよ！」

機を引き起こしてインメルマントーン。

F6Fの背後を取って、トリガーを引く。

短い発射音の後、F6Fは爆散する。

「残り二匹！」

日下部は上昇し、月に機首を向けた。

夜戦において、月に向かって飛ぶのは危険である。

自分の機影が、相手にはつきりと目視されてしまうのだ。

「着いてこい、着いてこい！」

二機のF6Fは食らいついてきた。

上昇力では、米軍機の方が上と思っているのだろう。

陣風の発動機は高々度用で馬力はあるが、機械としての完成度ではF6Fのプラット・アンド・ホイットニー R-2800には及ぶまい。

しかし、二機のF6Fが近づいてきたとき、日下部は左に急旋回した。

更に旋回中に機を逆方向へ横転させ、急激に減速する。

F6Fは日下部の陣風を追い越して、前方に出てしまう。

「もらった！」

後部の一機を20mm弾の餌食にする。

最後のF6Fは旋回して逃れるが、機位を見失ったらしく、そのま

ま逃げようとしていた。

（逃げるなら逃げろ、追いはしない）

日下部はQ島へ機首を向けた。

敵機の撃墜が任務ではない。

「……おつ、見えてきた」

三角形の島の影が前下方に見えた。

日下部は元倉から聞いた辺りの場所を目指し、高度を下げる。

『神州』は偽装網をかけられているようだ。

（もしかしたら、撃ってくるかもしれない……）

警戒しながら、低空で軽く旋回し、機体下部に取り付けられていた通信筒を投下した。

「投下完了。後は野となれ、山となれ……」

日下部は来た道を引き返す。

燃料は残っているし、まだ夜は明けていない。

しかし速度を上げようとしたとき……

「！」

前方に、夥しい機影。

二十機以上はいる。

F6FとP-61の大群だ。

「……ちよつと大人げないんじゃないか？」

おそらく新型機を発見したとして、先ほど逃げたF6Fが報告したのだろう。

暗闇で機体の細部まで見ることはできなくても、20mm機銃を六挺も装備していたとなれば、新型以外に考えられない。

（墜としておくべき……だっ たかもな）

……今まで、数多くの戦友が散っていった。

ある者は爆撃機に体当たりし、ある者は対空砲火を受け、またある者は突然の事故で……。

それが戦争。

敵も味方も、次々と死んでいく。

「……ここを突破して、基地に帰還……まあ、不可能だろうな。普通はよ」

飛行機乗りは、地上の人間とは違う「生」を生きている。
飛んで、戦い、儚く散っていく。

「だが俺の腕と……この陣風の力なら……！」

短い命。

ならばせめて、美しく飛ばうではないか。

「頼むぜ、陣風！」

.....

.....

...

勅書は確かに届いたのだろう。

日下部直衛の名も、原爆を用いての特攻作戦も、歴史に記録されることはなかった。

元倉少佐も後に行方不明となり、陣風は再び、幻の世界へと帰って行った。

そして、21世紀。

「機長、そろそろですね」

「ああ」

雲海の上を飛ぶ、ボーイング747旅客機。

そのコクピットで、中年の機長がコーヒーを飲み干した。

「静かな空だな。親父にも見せてやりたかったよ」

「機長のお父さん、海軍の戦闘機乗りだったんですね？」

副操縦士が尋ねる。

「ああ。『零戦』と『紫電改』と……あと一機種乗ってたらいいんだが、どの機種か教えてくれなかったな」

「もしかして、表向きには開発中止された戦闘機だったとか？」

「いや、まさか……」

機長は軽く笑った。

「都賀、お前のお祖父さんも、元海軍だったな」

「ええ、巡洋艦に乗ってたらしいんですけど、俺が生まれた頃に死んじゃったから、詳しい話は……」

「そうか。そう言えば昨日、テレビで元米軍パイロットの証言とかいうのをやってたな」

「ああ、日本軍の捕虜になって、脱走に成功したって人ですよ。途中で出会った日本兵がそれを見逃したっていう……」

「そう、それだ。やっぱり、空を飛ぶ者同士、何か共感みたいなものがあったのかもな」

機長は微笑を浮かべる。
そして、指示を出した。

「そろそろ高度を下げるぞ」

「はい！」

21世紀。

日本の空は平和だ。

だがかつて、この空でそれぞれの信念と、誇りを持って戦った者達の残光は、

目に見えなくとも、確かに今も残っている。

……

長坂坡 - 十八試甲戦闘機『陣風』（後編） - （後書き）

……如何でしたでしょうか。

これで「風」の航空戦機は終了です。

またこのような形の空戦短編を書くつもりです。

次は「電」か、或いは「星」ってところでしょうか。

急降下爆撃や雷撃機の話も書いてみたいので。

そしてそのうち、艦魂にも挑戦してみようと思います。

その他で「この軍用機を書いて欲しい」という希望のある奇特な方がいらつしゃいましたら、教えてください（爆）。

それでは、これから宜しく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1998f/>

日本軍 「風」の航空戦記

2010年10月9日14時11分発行